

#### 4 徳島県立文学書道館 事業実績

文学・書道資料の収集・保存、調査研究に努めるとともに、その成果を展示や催し、教育普及事業などに生かし、広く県内外の人々から利用される施設となるよう魅力ある事業展開を図った。

##### (1) 顕彰、表彰事業 【1,474千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	第16回とくしま文学賞	<p>広く県民から文芸作品(10部門)を募集し、発表の場を提供することにより、文芸活動の活性化、県民文化の向上を図った。今年度は、小説29人、脚本3人、文芸評論5人、児童文学16人、随筆59人、現代詩338人、短歌350人、俳句519人、川柳161人、連句24人の計1,504人から2,347点の応募があった。各部門の入選作品は「文芸とくしま」に掲載し、当館で表彰した。</p> <p>表彰式:平成31年2月11日                      応募者数:1,504人                      応募作品数:2,347点                      会場:ギャラリー</p>	1,474,342
	小計		1,474,342

##### (2) 年鑑編集・刊行事業 【553千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	ことのは文庫 「田中富雄 古代歴史小説集」	<p>当館の常設展示作家・田中富雄(元「徳島作家」主宰)が残した「生口記」など、歴史小説の名品を1冊にまとめ、刊行した。</p> <p>文庫本サイズ 800部                      販売価格:400円</p>	339,680
2	研究紀要「水脈」15号	<p>館が所蔵する文学者や書家に関する作品や資料等の調査研究を行い、その成果を紹介するために刊行した。</p> <p>B5版サイズ 700部                      販売価格:無料</p>	213,408
	小計		553,088

##### (3) 教育普及育成事業 【3,770千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	文学講座 芸術・文化を語る	<p>徳島ゆかりの芸術家、研究者、文化人に専門分野のお話をしていただき、平和で心豊かな社会の創造について考える講座。京都大学大学院生で書評ブロガーの三宅香帆氏、鳴門市ドイツ館学芸員の長谷川純子氏、グッドデザイン賞を受賞した神山町のキネトスコープ社代表・廣瀬圭治氏、脚本家の向井康介氏を迎えた計4回の講座は、いずれも専門家ならではの見識と豊富な経験に学ぶところが多く、いずれも充実したものとなった。</p> <p>日時:平成30年4月～7月(全4回・各土曜)                      受講者数:150人                      受講料:無料                      会場:講座室</p>	314,068

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
2	文学講座 言の葉テーマ朗読会	<p>展覧会に即したテーマと反戦にちなんだ朗読会を行った。5月「寂聴著『手毬』を読む」、7月「反戦」、1月「丸川賀世子著『有吉佐和子とわたし』を読む」の計3回。講座生がよく内容を読み込み、伝わる朗読ができた。</p> <p>日時:平成30年5月～平成31年1月(全3回) 受講者数:125人 受講料:無料 会場:講座室</p>	5,520
3	文学講座 荒川洋治の文学入門	<p>現代を代表する詩人であり、その読書論・文学論でも定評のある荒川洋治氏による連続講座とあって多くの受講生が詰めかけた。巧みな話しぶりで爆笑を誘いながら、埋もれた名作の魅力や、自身の経験による出版・流通の実情など、広く深い見識に受講生は圧倒された。各回に設定されたテーマを通じて、文学の本質とは何か、実益の点で排除されがちな文学が、なぜいま必要なのかを真摯に語り、一人一人が人間の在り方について問う大きな指針となった。</p> <p>日時:平成30年4月～9月(全6回・各土曜) 受講者数:252人 受講料:無料 会場:講座室</p>	711,552
4	文学講座 若い人たちのための小説家養成講座	<p>小説家をめざす人たちに向けての佐々木義登四国大学教授による講座。現代小説とはどういうものか、どういう風に行けばよいかという講義に加え、受講生が提出した作品やプロの作品を受講生と一緒に講評した。自らの作品に足りていないものやプロがどういう風に行っているかを実践的に学んだ。</p> <p>日時:平成30年6月～平成31年3月 (全8回・各土曜) 受講者数:51人 受講料:無料 会場:講座室</p>	240,000
5	文学講座 短歌を作ろう	<p>現代短歌の秀歌を鑑賞しつつ、実作を基礎から学ぶ講座。「自分を詠む」「家族・友人を詠む」「社会・時代を詠む」「遙かな世界を詠む」「故里を詠む」など、各回のテーマについて理解を深めながら、経験者も初心者も共に実作を試み、短歌を作る楽しさを学んだ。講師は歌人の竹安隆代さん。</p> <p>日時:平成30年9月～平成31年2月 (全6回・各土曜) 受講者数:205人 受講料:無料 会場:実習室</p>	121,860

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
6	第17回言の葉朗読会	自分の好きな文学作品を5分以内で朗読する、年1回の朗読会。今年は12組18人が朗読した。  日時:平成30年9月22日(土) 受講者数:48人 受講料:無料 会場:講座室	2,020
7	秋の文学講演会 I	作家の松浦理英子氏が小学6年から中学2年まで徳島で過ごした逸話に触れながら、定式を使って答えを出すことを嫌う性質が、ひいては創作の理念と方法につながっていることを述べた。未成年者や性的マイノリティに対して正義を振りかざす圧力の存在が、昨年、泉鏡花文学賞を受賞した『最愛の子ども』の着想のもとにあることを明かした。松浦氏がどれほどの思いと時間をかけて作品に向き合ってきたのか、真摯に語られる言葉は聴衆に響き、涙を流す者もいた。質疑応答では充実した質問がいくつも寄せられ、サイン会では30人ほどが並んだ。  日時:平成30年10月21日(日) 受講者数:70人 受講料:無料 会場:ギャラリー	571,181
	秋の文学講演会 II	史上最年少17歳での文藝賞「黒冷水」、第153回芥川賞「スクラップ・アンド・ビルド」などで知られ、テレビ出演などメディアでの活躍も華々しい羽田圭介氏を招いた。本が売れない現代において、作家として生きることの困難と使命を、実体験に基づくエピソードを交えて語った。講演の前後に行ったサイン会では100人以上が並び、講師は一人ひとりに声を掛けていた。  日時:平成30年11月18日(日) 受講者数:150人 受講料:無料 会場:ギャラリー	
8	書道講座 仮名を学ぶ 連綿	昨年度開催の仮名講座「仮名を学ぶ いろは歌」に続く講座「連綿」。上田輝芳氏(流輝会主宰)を講師に招き、初回は「とり」「はる」ほか12種類の2字連綿を練習。2回目は「あせ」「すれ」「うめ」ほか15種類の連綿を問題形式で練習した。最終回は和歌一首を練習し、料紙に仕上げた。作品は7月10日から25日まで当館ロビーに展示した。  日時:平成30年6～7月(全3回・各日曜) 受講者数:49人 受講料:無料 会場:実習室	55,830

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
9	書道講座 書道創作講座 草書	<p>昨年度の「書道創作講座 行書」に続く講座で、講師は讃岐浩史氏(神戸大学講師)。初回は、主に草書についての講話。書の創作、草書の起源、特質についての話があった。用筆のポイントは①一字一呼吸②側筆・中鋒の変化③筆の表裏の転換の3つ。その後「自為」を練習した。2回目は、草書の名品を鑑賞した後、鉛筆で草稿を作り半紙に練習した。最終回も名品鑑賞ののち半紙に仕上げた。作品は7月29日から8月14日までロビーに展示した。</p> <p>日時:平成30年7月(全3回) 受講者数:28人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室</p>	49,680
10	書道講座 肖形印を作ろう	<p>1寸(約3cm)角の印材に、干支や似顔絵などを刻す篆刻講座。はじめに篆刻の歴史や、刻し方などの説明があった後、各自が制作に取りかかった。田淵南亭氏(篆刻研究家)の懇切丁寧な指導のもと、受講生同士でも意見交換をしながら、それぞれが理想とする肖形印の完成を目指した。最後に出来上がった印を印箋に押し提出。作品は8月24日から9月7日まで1階ロビーに展示した。</p> <p>日時:平成30年8月(全3回) 受講者数:34人 受講料:無料 材料費実費 会場:実習室</p>	52,190
11	書道講座 自作の俳句を書こう	<p>福島せいぎ氏(俳誌「なると」主宰)による作句講座と浜佳香氏(県展招待)による書道実技講座を各2回行い、自作の俳句を色紙に揮毫した。作句講座は、俳句の基本知識の講義の後、受講者が秋の俳句を詠み、俳句の鑑賞と講師による添削指導を行った。書道実技講座では、筆の持ち方や運筆の基本の説明後、文字の構成や、墨色、筆の違いによる表現方法があることを知り、作品のイメージをふくらませた。講師による個別指導によって、各自、数点の色紙作品ができあがり、作品は11月3日から18日まで1階ロビーに展示した。受講者からは、「手本のない書道をするのは初めてで楽しかった」など好評の声が多かった。</p> <p>日時:平成30年10月(全4回) 受講者数:46人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室</p>	78,930

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
12	書道講座 外国人のための書道講座	<p>昨年に続き、外国人を対象にした書道講座を当館学芸員の指導で開催した。日本語に不慣れな方のために、当館職員による英語通訳を行った。はじめに日本の書道や漢字について話し、書道道具の名称や扱い方、筆の持ち方、書く姿勢を説明した。スクリーンを使用して基本点画を実演しながら、各自が練習。その後1時間程度、手本を参考に漢字一字の小作品を制作した。作品は11月20日から12月7日まで1階ロビーに展示した。参加者からは「また開催してほしい」という声があった。</p> <p>日時:平成30年10月21日(日) 受講者数:7人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室</p>	1,986
13	書道講座 新春 書き初め 大字に挑戦!	<p>毎年恒例の小学生対象の講座。伝統文化の「書き初め」にちなんで、特大筆(全長46cm、穂の長さ14.5cm×穂の直径4cm)と68cm×70cmの紙を使って大字作品を制作した。当館学芸員が書き初めの由来や、書道道具の材質と使い方、筆の持ち方、書く姿勢、運筆の基本を説明したあと、約1時間で、各自が書きたい漢字一字を、墨をたっぷり含んで重くなった筆で、体全体を使って揮毫した。最後には迫力のある大字作品が仕上がり、作品は1月9日から31日まで1階ロビーに展示した。</p> <p>日時:平成31年1月6日(日) 受講者数:19人 受講料:無料 会場:実習室・講座室</p>	30,966
14	書道講座 書の鑑賞 漢字	<p>漢字書の魅力や見方を学ぶ鑑賞講座。講師は読売新聞編集委員で美術評論家の菅原教夫氏。美術記者としての視点や、日展審査員を務めた経験から、書の要素ごとに鑑賞すれば理解しやすいことを紹介。戦後の巨匠たちの作品を取り上げ、特に「線」「形」「気」の三つが重要な要素であることを説明した。同時に「スケール感」も大切だと述べ、時代の中でひときわ輝いている作品にはスケール感が備わっていると語った。</p> <p>日時:平成31年3月17日(日) 受講者数:110人 受講料:無料 会場:ギャラリー</p>	187,227
15	ことのは ロビーコンサート	<p>従来 of 文学・書道ファンだけでなく、より多くの県民に文学書道館の存在を知ってもらい、さらに足を運んでもらって、文学・書道と音楽の深いつながりを気軽に楽しく体感してもらおうと、昨年度に引き続き開催した。美しい中庭を背景に、上質の音楽を聴く喜びを、幅広い層の聴衆が味わった。毎回楽しみに参加しているというファンも、徐々に増えてきた。</p> <p>日時:平成30年5月～平成31年3月 (全6回・各日曜) 入場者数:1,488人 入場料:無料 会場:ロビー</p>	1,347,363
	小計		3,770,373

## (4) 展示事業【18,398千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	文学常設展 瀬戸内寂聴記念室  (常設展示事業)	瀬戸内寂聴の人生をたどりながら寂聴文学を紹介する記念室。京都・嵯峨野の「寂庵」を模した書齋や、心とませる日本庭園を設置している。年2回の展示替えも行った。  期間: 通年 会場: 瀬戸内寂聴記念室	-
2	文学常設展 文学常設展示室  (常設展示事業)	徳島の人・場所・文化が織りなす文学回廊。徳島にゆかりの深い文学者とその作品、徳島を描いた文学作品などをさまざまな角度から感じとれる展示としている。展示室内では、年2回の文学企画展として「『明星』と徳島の歌人たち」、「阿波路の山頭火」を開催した。  期間: 通年 会場: 文学常設展示室	-
3	文学常設展 収蔵展示室  (常設展示事業)	瀬戸内寂聴寄贈による日本近代女性史の貴重な研究資料など、豊富な資料を保管している収蔵庫内をガラスウォールを通して見学できるようにしている。また、特別展に関連した展示や収蔵品を紹介する展示を行った。  期間: 通年 会場: 収蔵展示室	-
4	書道常設展 書道美術常設展示室  (常設展示事業)	徳島ゆかりの書家を中心に豊かな書の世界が広がる展示室。年3回の展示替えを行い、収蔵している豊富な作品などを幅広く紹介している。本年度は「仮名」「中林梧竹の長条幅」「新収蔵の書Ⅲ」を開催した。  期間: 通年 会場: 書道美術常設展示室	-
5	文学特別展 寂聴「手毬」ー良寛と貞心の愛  (特別展示事業)	瀬戸内寂聴は小説「手毬」(1990年1月～12月「新潮」連載、1991年3月刊)で禅宗の僧良寛と貞心尼の清らかな魂の交流を描き、映画化もされた。本展では相聞歌を中心に、寂聴が二人の愛をどう捉えたかを展示した。また、良寛の書と貞心尼の直筆、二人を描いた絵画などを展示し、その生き方や人柄を紹介した。  会期: 平成30年4月8日～5月27日 44日間 入場者数: 492人 観覧料: 250円～510円 会場: 特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	2,658,830

## (4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
6	書道特別展 小坂奇石の折帖  (特別展示事業)	海部郡美波町生まれで、昭和を代表する書家として知られる小坂奇石(1901～91年)。今回は、奇石が門人に書き与えた臨書手本「折帖」を展覧した。折帖は作品とは異なる魅力にあふれ、奇石の書の背景を知る上で貴重な資料である。本展では、奇石の折帖35点とともに、古典の臨書原本を拡大しパネル展示したほか、奇石ゆかりの書家の書や奇石の臨書観も併せて紹介した。関連事業として、トーク・作品解説を開催したほか、ロビーではDVD「二十世紀の巨匠たち」のうち小坂奇石の映像(15分)を放映。図録はA4版横で作製し販売した。  会期:平成30年6月22日～8月5日 39日間 入場者数:1,090人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー	1,975,412
7	文学特別展 竹宮恵子 カレイドスコープ 50th Anniversary  (特別展示事業)	徳島出身のマンガ家・竹宮恵子(1950～)の画業50年をまとめた巡回展。竹宮自身が考案した精細な複製原画「原画」(ダッシュ)やモノクロの直筆原稿160点を中心に、発表まで7年を費やした「風と木の詩」の構想ノートや萩尾望都らと研鑽を積んだ「大泉サロン」の復元模型などに加え、当館独自に徳島ゆかりの作品などを増やして展示した。  会期:平成30年8月11日～9月24日 39日間 入場者数:1,512人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	2,697,365
8	書道特別展 荒井天鶴一孤高の書とその美学  (特別展示事業)	戦後、徳島の書壇をリードした書家、荒井天鶴(1914～2007年)をテーマとした特別展。天鶴は県内初の書道結社を創設し書道月刊誌を創刊、早くから書道人の育成に尽力した。また全国に先駆けて近代詩文書を提唱し、書の一部門として確立、徳島に根付かせた書家であった。さらに文学と書の一体化を唱え、自作の俳句や言葉を揮毫し、優れた書論も数多く残している。本展ではその書論と作品46点、半紙21点、著書、文房具などを展示し、高邁な理想を掲げた孤高の書家・荒井天鶴を紹介した。関連事業として、トーク、作品解説、書論解説、展示解説(2回)を開催。またA4版78ページの図録を作成し観覧者に配布した。  会期:平成30年10月5日～11月18日 39日間 入場者数:826人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・書道美術常設展示室	1,376,541
9	文学特別展 有吉佐和子と丸川賀世子—二人の作家の友情  (特別展示事業)	『恍惚の人』『複合汚染』などが戦後の記録的ベストセラーとなり、鋭い発言と旺盛な行動力で常に脚光を浴び続けた作家・有吉佐和子(1931～84年)。時代の寵児だった有吉も、親友・丸川賀世子(1931～2013年、徳島市出身)に見せていた素顔は、子どものように素直で、不器用で、はかないものだった。本展では、有吉の死後およそ10年を経て書かれた丸川の著書『有吉佐和子とわたし』(文藝春秋、1993年)をひもとき、直筆原稿や遺愛品、写真などを用いながら、2人の生き生きとした時間を再現した。収蔵展示室では、徳島ゆかりで芸芸に生きた人々をテーマに、優れた伝記小説を多く残した作家・丸川賀世子の業績を紹介した。  会期:平成30年12月16日～ 平成31年2月8日 40日間 入場者数:496人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	1,857,263

## (4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
10	書道特別展 巨匠の書一きらめく独創  (特別展示事業)	戦後間もなくの頃から平成時代に発表された巨匠の傑作や代表作68点を紹介する特別展。戦後、書は壁面芸術として様式的に多様な展開を見せ、作家たちは造形芸術としての現代的な書の創作を試みるようになった。そして、自身の作風を模索しつつ、それぞれの持論を強く主張した傑作が次々と登場した。本展では、日本芸術院や東京国立博物館など全国の書道関係館10館や個人などから作品を借用し、会期を2期に分けて30点を展示替えした。関連事業として講演会、展示解説(2回)を開催。なお図録はA4版カード式で作製し販売した。  会期: I 期 平成31年2月15日～3月10日 II 期 平成31年3月13日～3月30日 計38日間 入場者数:1,166人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・書道美術常設展示室	5,464,427
11	文学企画展 「明星」と徳島の歌人たち  (企画展示事業)	文芸誌「明星」は、短歌革新を志す与謝野寛(鉄幹)によって創刊され、妻の晶子をはじめとする多くの俊才を輩出した。そのような一時代を築いた雑誌に、徳島からも精力的に作品を発表し、才能を認められた歌人がいた。本展では「明星」の誌面を飾った徳島の歌人たちを、その歌や与謝野夫妻との交流を中心に展示した。また、1931年に与謝野夫妻が徳島を訪れたときの様子を当時の写真や新聞記事を交えて紹介した。  会期:平成30年5月25日～7月31日 55日間 入場者数:1,094人 観覧料:100円～300円 会場:書道美術常設展示室	191,003
12	企画展 夏の書道収蔵品展 中林梧竹の長条幅  (企画展示事業)	中林梧竹を支援するとともに作品を収集した海老塚的伝(1882～1964)。今回の中林梧竹展は、的伝が徳島県に寄贈した中林梧竹の作品の中から長条幅(縦240cm、横60cm)を特集。迫力ある大字から連綿草書まで19点を展示した。また小坂奇石及び貫名菘翁の作品も紹介した。  会期:平成30年6月19日～10月2日 90日間 入場者数:3,001人 観覧料:100円～300円 会場:書道美術常設展示室	109,512
13	文学企画展 阿波路の山頭火  (企画展示事業)	自由律俳句で知られる種田山頭火(1882～1940年)は、生涯に2度徳島を訪れている。最初は1928年1月、徳島で新年を迎え、四国88カ所の札所を巡拝。2度目は1939年9月に出発した四国遍路の旅で、徳島には11月1日に入っている。彼の日記や俳句などを通して、阿波路の旅を紹介した。遺品や直筆も展示した。  会期:平成30年11月10日～平成31年1月20日 55日間 入場者数:1,218人 観覧料:100円～300円 会場:文学常設展示室	570,022



## (4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
14	書道企画展 第3回 書道創作グランプリ  (企画展示事業)	小学4年生から高校生までを対象に、応募のあった704点の中から209人を選考(予選)。予選通過者と、招待(グランプリ1回受賞者または準グランプリ2回受賞者)を対象に11月3、4日に本選を実施した。小中学生は各学年、高校生は漢字・漢字仮名交じり・仮名の各部門ごとにグランプリ、準グランプリ、金賞、銀賞、銅賞を決定し、12月1日～11日まで本選作品全てを展示した。また金賞受賞者以上を対象に12月9日に表彰式を実施した。  会期:平成30年12月1日～11日 9日間 入場者数:663人 観覧料:無料 会場:ギャラリー	546,822
15	書道企画展 「今年の一文字」展2018  (企画展示事業)	年末恒例の「今年の一文字」展。この一年を振り返って、世相や印象に残ったことを表す漢字一字をはがきに揮毫してもらった。3歳から78歳まで646点の応募があった。今年最も多かったのは「友」、理由は「みんなが大切だから」「友だから」など。続いて「新」、「新しい生活が始まったから」ほか。次は「楽」、「毎日楽しかったから」ほか。他の上位の漢字は、笑、挑、元、心、夢、忙、努などだった。  会期:平成30年12月12日～27日 14日間 入場者数:321人 観覧料:無料 会場:1階ロビー	8,901
16	文学企画展 街のポーカフェイス	「街のポーカフェイス」と題し、街の中で顔に見えるモノを撮り続けているフォト・グラフィックデザイナー阪東勲。国内外で撮影した作品に加え、新しく徳島で撮った作品を展示し、各コーナーに短いエッセイを付けて紹介。阪東氏の著書や作品が掲載された週刊誌なども展示した。  会期:平成30年12月16日～平成31年2月8日 40日間 入場者数:1,133人 観覧料:無料 会場:ギャラリー	941,964
	小計		18,398,062
	合計		24,195,865